~三　世界宗教の経済倫理　中間考察~

現世拒否の意義

現世拒否の二類型は、超越的創造神の概念だけでは行なわれず、約束や救済と結びついて、実践される。

|  |  |
| --- | --- |
| 瞑想的救済の所有 | 現世の行為は一切非合理的である為、現世に対立して救いを得る。 |
| 行動的禁欲 | 誠意に適うように行為。職業を通して、現世で堕落している人間の人格形成。 |

このうち、行動的禁欲は神秘論と融合することで、現実逃避となる。しかし行為を通じて救いの確証を得る点では現世での活動は認められている。

更に、上記の二つが近づき合うこともある。

現世と宗教の間の緊張

予言の内容が救済財の追求へと人々を向かわせる場合、生活様式は相対的に合理化されていく。更に苦難が内面的になる程、一層合理的になる。それは信徒を挫けないような状態に保つ必要があったからである。そこで永続的な救済の状態を保証される。

救いの予言は宗教に基盤をおく共同態を生み出す。ここで氏族共同態との衝突が生じる。血縁関係よりも宗教的同胞を重視し、教団としての宗教意識が出来上がる。この新しい社会共同態によって、宗教的同胞意識が展開される。然し、それでも苦難や堕落は余りに多かった。そこで一切の人間は生まれながらに不完全であることを前提として、無差別の愛が生まれる。この愛は普遍主義的同胞意識へ繋がるが、それは現世の価値や秩序と対立せざるを得ない。その対立は経済の分野で顕著である。